

二十歳の誓い

2021 年高校 2 年生の 4 月、コロナのパンデミックの中、カナダの国境が開いた瞬間、私は留学のために日本を飛び出しました。留学先は、都会のトロントから車で 3 時間、ほとんどの人が家畜を飼って自給自足をしている Formosa という地域です。Formosa は、電気や近代的な技術を使わずに、馬車や蠟燭を使って生活をしている地域で、外部からの情報が極端に限られている地域でした。そんな地域に飛び込んだ私は、まず同年代の友達から、「アジア人がコロナを持ってきた。」という差別を受けました。どんなに否定しても、親や学校の先生から教えられたことだけを信じるため、聞く耳を持ってもらえませんでした。

これは私が初めて体験した孤独というものでした。そんな時に教会のお祈りに参加する機会があり、そこでウクライナの難民の方と知り合いになりました。彼女は毎日教会にきて、「早く戦争が終わりますように」と、祈っているのです。彼女から戦争の話、戦場に出ている父親が心配なことなどを聞いているうちに、何だか自分の苦しみが小さく感じるように思えてきました。私も苦しい日々を過ごしていましたが、それは今だけの苦しみであって、ウクライナの彼女にとっては、終わりが見えない苦しみや辛さと、これから先もずっと戦い続けなければならないのです。この出会いをきっかけに、難民の方たちの助けになりたい、という思いが私の中に湧いてきました。

最初のホームステイ先では、話し相手もなく、学校に行っても味方がいないという環境はあまりにも辛く、とうとう耐えられなくなり、都会に住んでいるホストファミリーの家に移ることにしました。元々日本のことを知っているトロントのホストファミリーは、日本のことが大好きで、私のことを本当の家族のように暖かく迎えてくれました。難民問題についてや私の将来のことなど、私の考えを様々な角度から聞いてくれる素敵なお存在でした。この家族との出会いをきっかけに、その後のカナダ留学で難民問題に対してのプロジェクトを開き、今まで見ることはできなかった世界を見ることができました。

トロントの環境は、ホストファミリーだけでなく、街でも、みんな私に笑顔で話しかけてくれるとても温かい地域でした。このように、同じカナダでも、車で 3 時間の距離で対応が全く違うということを知りました。そして日本に帰ってからも、難民問題を一人でも多くの人に知ってもらいたいと、交流会活動が続けています。

私の目標は、先入観にとらわれず、物事を様々な方面から捉えることができるようになることです。そのためには、これから国際関係学や政治学など学ぶことはたくさんあります。そしていつか日本だけでなく、世界の国においても、不条理な苦しみにさらされている人の助け舟になりたいです。このことを「二十歳の誓い」とさせていただきます。

本日は私たちのために、このような盛大な記念式典を開催して頂きましてありがとうございます。心より御礼申し上げます。

令和 7 年 1 月 13 日 川崎 彩加